中国の義務教育課程国語教科書の特色について
――人民教育出版社刊『語文』六年級下冊を中心に――

西　川　真　子

はじめに

いずれの社会においても、公教育における国語課程の内容は、その社会で用いられる言語表現と強く結びついている。現在中国の義務教育課程においては、日本の「国語」に当たる「語文」がその役割を担い、国民が共有する言語のあり方と密接に関わりあっている。

一方、全国に等しい公教育を実施しようとすれば、学校制度の整備、教師の確保と並んで教科書の選定が大きな鍵となる。これは、授業でどのような教科書を使うかによって、国民の言語生活のみならず社会で共有される知識、思想及び価値観の形成に影響を与えるからである。

中華人民共和国では建国後間もない1950年、基礎教育の確立を目指し教育部から「小学語文課程暫行標準」が公布された。その第一章「目標」には小学校の語文課程の学習目標について、以下のように記されている。

一：主に児童文学の形式により普通語で書かれた文章を学習する中で、民族的特色を備え国民によく知られている文学を自然に理解するとともに、一般的な新聞、雑誌並びに科学読本を閲読する。

二：口語表現と作文の練習を通じ、普通語の会話と文章を用いて正しく思想感情を表現する。

三：書写の練習を通じ、正確かつ迅速に正書体並びに常用の行書体で書写する。

四：普通語と口語体の文並びに各教科の学習を連係させて、自然、歴史、地理に関する初歩的な常識を理解するとともに、愛国主義思想と国民公徳を身につける[1]。

建国直後、中国では国民の意識統合のために、全国に通用する普通語の確立と国家に対する所属意識の育成が急務となった。そのため小学校の中の語文課程は、国民相互の意思疎通に必要な普通語の普及、並びに国民としての最低限度の知識と思想道徳の共有を目標とした。この目標を掲げた教育のための教科書は、1950年12月教育部の直属機関として発足した人民教育出版社が編集発行し、全国で統一して使用されることとなった。

だが50年代末以降後、複雑な国家事情と政治上の混乱の影響を受けつづけ、安定した学校教育の推進が可能となったのは1980年代半ばのことである。まず1986年に教育部から「中華人民共和国義務教育法」の公布をみた。併せて語文課程については「全日制小学語文教学大綱」並びに「全日制中学語文教学大綱」が公布されて、義務教育段階における語文科目の教育方針が明らかになった。次いで2001年には教育部から「全日制義務教育語文課程標準（実験稿）」が公布され、現行の語文課程の土台となった。「全日制義務教育語文課程標準（実験稿）」は施行後も専門家の討議を経て修訂がなされ、2011年に「全日制義務教育語文課程標準（2011年版）」（以下、語文課程標準）の公布をみた。こうした経緯をたどり、現在中国の義務教育語文課程の授業は「語文課程標準」の規定に基づいて実施されている。

この間に、義務教育課程で使用される教科書についても制度の改変が行われた。前述のように建国当初より、中国の学校教育の場で使用される教科書は人民教育出版社が国定教科書として編集発行を受け持ち、それ以外の教科書は編集発行を禁止された。だが、1986年全国中小学校教材審定委員会が発足し、同委員会の審査を経て合格した教科書は発行を認められることとなった。そのため、現在では北京師範大学出版社、上海人民教育出版社等が独自の教科書を編集発行し学校教育の現場に提供している。た

だ、教科書の編集には多くの専門家と研究の蓄積を必要とするため、全国に通用する教科書の提供については従来通り人民教育出版社が主導的立場にあり、現在も全国で使用されている教科書の六～七割は人民教育出版社が占めているとされる[2]。

本稿は、このような経緯の上に現在使用されている小学校の語文課程の教科書について、その内容を考える[3]。考察の対象とする教科書は、2006年に人民教育出版社が発行し現在も使用されている『義務教育課程標準実験教科書　語文』（以下、語文）の中で小学一年から六年に配当されている全12冊とする。その中でも小学課程の最終学期となる六年生後期に学習する『語文』六年下冊は小学校における語文課程の集大成に当たるため、考察の中心に据えたい。

Ⅰ　「全日制義務教育語文課程標準（2011年版）」が定める中国の語文教育

現在中国の義務教育語文課程の指導指針となっている「語文課程標準」では、中国の小学校語文課程に如何なる内容を組み入れるものとされているのだろうか。これについて、「語文課程標準」前言には語文教育の指針を以下のように示す。

> 語文課程は学生の言語と文字の運用能力を培い、学生の総合的素養を高め、その他の科目を理解するための基礎の構築に力を尽くす。すなわち、学生が正しい世界観、人生観、価値観を形成し、良好な個性と健全な人格を磨くために基礎を固める。また、学生の総合的かつ生涯にわたる成長のための基礎を作る。語文課程は中華民族の優秀な文化と革命の伝統を継承し発展させ民族文化への共感を強め、民族の団結力と創造力を高めるために、他に代えられない重みがある[4]。

このように語文課程の目標は、公民に求められる語文の能力のみならず

他の科目を学習するための基礎力、正しい世界観、人生観並びに価値観の構築に加え、自国の文化と革命精神の継承を図る点にある。同じ内容は「語文課程標準」の第二部分「課程目標と内容」の項にも明記されている。すなわち同第1章「総合目標と内容」には語文課程の学習目標全10条が列挙されるが、その中で語文課程の基本理念に関わる第1条から第4条は、以下のように記されている。

一．愛国主義、集団主義、社会主義的思想道徳と健全な審美観を育み、個性を伸ばし、創造精神と協力精神を培い、積極的な人生への態度並びに正しい世界観と価値観の形成を図る。
二．中華文化の深さと広がりを知り、民族文化の智慧を汲み取る。現代の文化生活に関心を持ち、文化の多様性を尊重し、人類の優れた文化のエネルギーを吸収し、文化的品位を高める。
三．祖国の言語文字を熱愛する感情を育み、語文を学ぶ自信を高め、良好な言語学習の習慣を養い、言語学習の基本的方法を身につける。
四．言語能力を発達させると同時に思惟能力を伸ばし、科学的思考方法を学び、実事求是、真知を貴ぶ科学的態度を養う[5]。

実際の授業の中でこれらの目標は如何に達成されるのか。そして、この目標を達成するための教科書は、どのような内容から成り立っているのだろうか。

「語文課程標準」第二部によれば、小学校卒業時には約3000字の漢字を読むことができ、そのうち2500字を書写できることが目標とされている。閲読に関しては、普通語で正確かつ流暢に感情をこめて教材を朗読すること、毎分300字程度の速度で黙読する能力が求められる。叙述文を読むにあたっては内容を理解し作品に流れる情感と思想を把握すること、さらには中国を代表する古典詩詞約60篇を暗唱することが目標とされる[6]。

人民教育出版社版『語文』は小学一年から六年まで各学年の前期後期に

1冊ずつ、合計12冊で構成されている[7]。1冊ごとの構成をみると、各冊とも全体を六～八単元に分け、各単元はそれぞれ主題に沿って4～5点程度の教材から成り立っている。これに加えて各冊とも巻末には総合学習のための補充教材や中国歴代の古典詩詞が暗誦課題として提示されている。この中で閲読教材は論説文、小説、詩歌など多様な形式の文章が選ばれている。この中で中国の作品については、『論語』、『孟子』、『紅楼夢』、唐詩等歴代の古典作品から魯迅、老舎等現代中国を代表する文学者、そして現在も作品を発表している同時代の作家まで幅広く取り上げられている。授業においては、これらの作品の意味を理解するとともに文章の表現を鑑賞することが求められ、古典作品については本文を暗唱することが推奨されている。外国作品は、旧ソ連・ロシアの作品が最も多く選定されているが、米国、英国、フランス、イタリア、日本等の文学作品を各冊に分けて取り入れている。

本稿で主たる考察対象とする『語文』六年下冊は、2004年に全国中小学校教材審定委員会の審査を経て2006年の第1版刊行以降、現在まで継続して使用されている[8]。同書は全体が六単元に分けられ、それぞれ一「人生への想い」、二「民俗」、三「革命の先駆者」、四「外国文学の名作」、五「科学精神」、六「忘れ難き小学校生活」を主題とし、この中に必須教材10篇と略読教材11篇、合計21篇の教材を分散して取り上げている。また巻末には暗唱課題として中国歴代の名詩詞を掲げた「古詩詞暗誦」と、著名な作家の散文や日常生活の中の実用文を集めた「総合復習」が添えられている。

この教科書について「《義務教育課程標準実験教科書語文六年級下冊》簡介」[9]並びに「人民教育出版社義務教育課程標準小学語文実験教科書介紹」[10]は、時代の特色と現代意識を前面に表すと同時に、児童に対して革命指導者と革命の伝統について教え、伝統的な教材に対しては新しい意味を与えたと述べる。例えば、現在使用されている『語文』の教材には、それ以前に全日制小学校で広く使われていた『九年義務教育小学教科書　語文』か

ら引き続き採用されているものが数多くある。例えば、六年下冊の中では、「匆匆」（忽忽）、「十六年前的回忆」（十六年前の思い出）、「为人民服务」（人民の為に奉仕する）、「卖火柴的少女孩」（マッチ売りの少女）、「凡卡」（ワーニカ）がこれに当たる。その一方で、「手指」（指）、「北京的春节」（北京の春節）、「藏戏」（チベットの芝居）、「跨越百年的美丽」（百年を越える美）、「真理诞生于一百个问号之后」（真理は百の疑問符の後に生まれる）、「我最好的老师」（わたしの一番素晴らしい先生）などは新しい教材として『語文』の中に取り入れられた[11]。

『語文』六年下冊は、小学校における語文課程の集大成の意味を持つ。この教科書が如何なる意味を有するのか、以下に考察を進めたい。

Ⅱ　人民教育出版社『語文』六年下冊の単元構成と教材

「語文課程標準」が示す学習目標は、中国の公民に必要な言語能力、国内外の文学作品を鑑賞する基礎力、愛国精神と文化の多様性に対する理解に加え科学への関心を育むことにある。これらの課題は、小学校における語文課程の最後を締めくくる『語文』六年下冊の中にどのように取り入れられているのか、以下にその内容を考察したい。

〔第一単元　人生への想い〕

『語文』六年下冊第一単元は、「人生への想い」を主題とし、必須教材として第1課「文言文两则」（「学奕」[12]、「两小儿辩日」[13]）、第2課「匆匆」（忽忽）[14]、第3課「桃花心木」（マホガニー）[15]、略読教材として第4課「顶碗少年」（雑技団の少年）[16]、第5課「手指」（指）[17]が配されている。児童はこれらの教材を通じて、単元の主題である「人生への想い」をどのように学ぶのか。

まず第1課「文言文两则」の第1項「学奕」は『孟子』を原作とする。囲碁の名人として知られた奕秋には、二人の弟子があった。一人は師匠の教えに従い修行に専念した。もう一人の弟子は師匠の言葉に従おうとはする

ものの、白鳥の姿を見かければ弓でこれを射ようとして集中を欠き、前者には及ばなかった。孟子はこれを見て、何事かを身につけるには一心に精進すべきと説き、後者が前者に達しなかったのは、才能に欠けたからではなく、集中力の不足が才能の開花を妨げたのだと述べる。

つづく第2項「两小儿辩日」も同じく中国の古典文学から選ばれた教材であるが、第1項とは性格を異にする。すなわち『列子』を原典とするこの一文は、諸国歴遊中の孔子が二人の童子に出会い対話する場面として描かれている。ある日、孔子が東方に向けて旅を進めていたところ、二人の童子が意見を闘わせているのに出くわした。聞くと、一人は、太陽は日の出の時に人に近く、日中陽が高く上ると人から遠ざかると言う。もう一人は、日の出の時には太陽は人から遠く日中には近くなると言う。前者は「日の出の時の太陽は車の蓋いのように大きく、昼間は盆のように小さくなる。これは遠くにあるものは小さく、近くにあるものは大きいからだ」と述べた。これに対して後者は「日の出の時は冷えて寒いのに、日中は暑くなる。これは近くにあるものは熱く、遠くにあるものは冷たいという道理と同じではないか」と反論した。孔子はどちらの言い分も道理があるとして返事に窮した。すると二人の童子は笑って「あなたが物知りだなんて、いったい誰が言ったんだ？」と孔子をやり込めた。

この二つの教材は、ともに中国の古典作品を原典とするが、第1項「学奕」は、一つの道を究めるには、精神を集中し努力しなければ何事も達成し得ないと正面から道理を説く。これに対して第2項「两小儿辩日」では、知者として名高い孔子を子供が理屈で立ち往生させ、痛快な気分を発散させている。

第2課「匆匆」は朱自清（1898～1948）が1922年に発表した散文で、長らく語文の教科書に掲載されつづけている伝統的な教材である。朱自清は江蘇省出身、現代中国を代表する文学者で北京大学哲学科を卒業後、各地で教壇に立ちながら詩や散文、文学評論を書き続けた。ここに取り上げた「匆匆」は朱自清の代表作として知られる。教師用指導書によれば、「匆匆」

の学習目標は、作者が日常の中の小さな場面を切り取って描いた、一瞬も止まることなく流れ去る時間への愛惜の情を感得することにある。

作品の中で、時間が流れ去る様を表す例は平易な比喩によって示される。作者は、季節の移ろいの中で来ては去り行く燕、柳の緑、桃の花に借りて時間が一瞬のうちに移りゆくことを表現する。人間の生活に目を移せば、手を洗い、茶碗を手に飯を食べ、黙って物思いにふける最中にも時間は手のひらからこぼれ落ちるように過ぎ去っていく。一度過ぎ去った時は何故戻ってこないのか、一刹那の時間に対する作者の痛切な思いが全編から溢れ出す。人間の生きる姿勢を正面から問い、一瞬たりとも時間を無駄にせず生きることを説く点は、第1課第1項「学奕」と主旨を同じくする。

第3課「桃花心木」は台湾の作家林清玄の作品である。本文では、マホガニーの苗を植え育てている人物のエピソードを、「わたし」の眼を通して描く。田舎にある「わたし」の家の側に空地が有り、ある男性がここを借りてマホガニーの苗を植えた。その後、彼は苗に水を遣りに通って来るのだが、三日目に来たかと思えば五日目になることもあり、時には十数日間一度も現れないこともあった。水遣りの間隔が不規則なために苗が枯れてしまうこともあるが、彼はそれも見越しているのか、枯れた苗の代わりに植える新しい苗を持参してくる。「わたし」には彼が何故こんな行動を取るのか理解できなかった。そこで、ある時、彼にその理由を尋ねてみた。すると彼は、マホガニーが厳しい環境でも深く根を張り逞しく育つように、敢えてこのような育て方をしているのだと語った。

「桃花心木」もまた、日常の風景を題材としながら人間が生きる上で求められる姿勢を説く。だが、厳しい環境に耐えて地に根を張るような生き方を模範として示しながらも、鋭く突き刺すように読者に迫る「匆匆」とは対照的に、ある種謎解きのように話が展開し読者の関心を捉える筋書きとなっている。

これを第一単元全体の中でとらえると、第1課第1項「学奕」と第2課「匆匆」は同類の教材で、いずれも人生を正面から直視し人間の生き方につ

いて考えさせる。これに対し、第1課第2項「两小儿辩日」は第3課「桃花心木」と通底し、人生の道理を説きながらも読者に視点の転換を促し、意外性を含む構成となっている。

〔第二単元　民俗風習〕

第二単元は「民俗と風習」を主題とする。必須教材の第6課「北京的春节」（北京の春節）[18]は現代中国を代表する作家老舎の作品である。略読教材には第7課「藏戏」[19]、第8課「各具特色的民居」[20]、第9課「和田的维吾尔」[21]の三つが挙げられている。

中国の首都として、北京は他の都市に比して特別な地位にある。小学『語文』全12冊の中で北京を主題にした教材は、『語文』一年上冊第11課「我多想去看看」（見に行ってみたい）、同二年上冊第10課「北京」、同二年下冊第12課「北京亮起来了」（北京は明るくなった）が挙げられるが、これら低学年の教材は北京が中国の首都であり、その中心に天安門と人民英雄記念碑が位置すること、故宮や王府井が北京を代表する名所だと教えることが目的となっている。小学校高学年になると、『語文』五年下冊第26課「开国大典」（建国の祝典）[22]においても北京は登場する。「开国大典」は、1949年10月1日首都北京で中国人民共和国成立を記念して開催された祝典の様子を叙述する作品である。原作者の李普は新聞記者として毛沢東国家主席による建国宣言とこれに続く祝賀行事を取材した。彼の残した記録は記事となって翌日の人民日報に掲載された。

これに対して、「北京的春节」は、建国以前からつづく伝統的な北京の春節の風俗が描かれる。原作者である老舎は、1899年、清末の北京に暮らす貧しい旗兵の家に生まれ、少年時代を北京で過ごした。彼は長じて作家となった後、北京を舞台とする庶民生活の哀歓を軽妙な筆致で作品にした。「北京的春节」は、1951年1月に雑誌『新観察』に発表した作品で,文中には春節を迎える北京の庶民の姿が、季節の食習慣、行事、しきたり、街の情景などとともに描かれている。年越しの餃子をはじめ、暦に合わせて供

される伝統的な食物、年末の大掃除、爆竹、親戚や友人を訪ねる年始の習慣、廟会の縁日の風景など、庶民の暮らしが細かにつづられる。そして本文最後の段落は「十二月から正月の時期、農村では一年で一番のんびり過ごす季節だ。灯節が過ぎると天気も暖かくなり、みんなまた忙しく仕事に勤しむ。北京は都市ではあるが、北京もまた農村とともに歳越しを迎え、取り分け賑やかに祝うのである」[23]という文で結ばれている。この一文は、首都北京を農村に引き付け、北京の庶民の暮らしの中にも農村の同様の習慣が息づいていることに触れている。広大な国土を有する中国では、北京との関係を見出し難い地域も少なくない。これに対して本教材は、首都北京が農村と一体の存在であると言い、都市部とは生活環境が異なる農村部の児童を意識して、首都北京でも春節には農村の習慣を共有することを説く。このように『語文』の教材は、テキストの原作、主題、他の教材との関連性を考慮し様々な角度から検討した後に選ばれている。

〔第三単元　革命の先駆者〕

老舎が語る春節の賑わいとは遠く、民国時代の中国では国民の中に広がる貧困と社会不安が無視できない状況にあり、後に中国の社会主義革命を導いた先駆者たちは、この中から登場した。中国革命指導者と同世代の国民はその体験を共有し、中国共産党の指導者に親近感を抱くことができた。しかし、中国共産党の政権樹立後、既に六十五年の歳月が流れ、中国革命を体験した国民は減少しつづけている。そのため、中国における社会主義革命の歴史と革命の先駆者に関する基礎知識を国民がいかに共有するのかが、切実な課題となっている。中国共産党政権の樹立を自ら体験した世代には説明する必要のなかった事柄も、現在の小学生とは接点が見出し難いからである。

この現実を背景に、義務教育課程の中で中国革命の指導者について学ぶことは大きな意味を持つ。特に語文課程の中で中国革命に貢献した人物を教材として取り上げるには、如何なる基準によって誰を選ぶのか、取捨選

択が必要となる。『語文』では小学一年下冊から、中国共産党の指導による社会主義革命の推進と中華人民共和国の建設に関わった人物を主題とする教材が、各冊に必ず選定されており、学習者は毎学期ごとに革命の先駆者について学習する。中でも毛沢東は中華人民共和国の建国に最も貢献した指導者として特に重要な存在で、『語文』一年下冊第22課「吃水不忘挖井人」（水を飲む時には、井戸を掘った人を忘れない）[24]に登場するのに加え、『語文』小学五年上冊には毛沢東を主題とする単元が設けられ4つの教材が集中的に配されている[25]。毛沢東に次ぐ重要な指導者として、鄧小平[26]、周恩来[27]もそれぞれ異なる学年で複数回ずつ教材に取り上げられている。この他にも『語文』の中では中国の社会主義建設に貢献した人物として雷鋒[28]、宋慶齢[29]を主題とする必須教材を学習する。『語文』六年下冊第三単元はこれらの学習を総括する形で「革命の先駆者」を主題とし、必須教材として第10課「十六年前的回忆」（十六年前の思い出）[30]並びに第12課「为人民服务」（人民の為に奉仕する）[31]が採録されている。また、略読教材には第11課「灯光」（灯火）[32]、第12課「一夜的工作」（ある夜の仕事）[33]が配されている。

「十六年前的回忆」は、中国の政治思想家李大釗（1888～1927）[34]が弾圧を受けて逮捕された後、極刑に処された経緯を描く。李大釗は、1913年早稲田大学に留学し社会主義思想に触れた。帰国後は中国に初めて体系的にマルクス主義を紹介し、1921年の中国共産党創立時には指導的役割を果たした後、国共合作の実現にも深く関わった。これと同時に李大釗は蔡元培に請われて北京大学で教鞭を取り、学生たちに強い影響力を持つ存在となっていった。だが、奉天派軍閥の張作霖はこれを危険視し、1927年4月6日早朝、李大釗とその妻子を逮捕した。獄中で厳しい取調べを受けた後、李大釗の妻子は同月28日に釈放されたが、李大釗本人は絞首刑に処され39歳の生涯を閉じた。

「十六年前的回忆」は、当時十六歳で自らも囚われの身となった李大釗の長女李星華が、事件から16年経った1943年に執筆した回想録を原作とす

る。この教材の学習目標は、中国革命の先駆者たる李大釗が、政治権力によって極刑を受けようとも信念を貫いた事実を知ることにある。中国共産党草創期最大の指導者で、中国に初めて本格的にマルクス主義思想を紹介した李大釗の名前は国民に記憶されねばならない。だが、現在の小学生にとって李大釗は毛沢東、鄧小平などよりもさらに遠い存在である。思想家並びに政治指導者として李大釗は多くの著作を残しているが、小学校の語文課程でそれらを教材とすることは難しい。また、李大釗の功績を略述した教材を読むだけでは語文課程で実践すべき文章表現の学習には不足し、李大釗の思想と行動を児童の記憶に刻むことも不可能である。

しかし、これらの課題を克服し現代の小学六年の児童に実感をもって李大釗を理解させるには、「十六年前的回忆」は教材として有効な条件を備えている。まず、この作品は李大釗が逮捕処刑された状況を、李大釗の長女が少女時代に自ら体験し記録した回想録であり、現代の小学生との接点を見出し易い。これに加えて、原作者である李星華はこの作品の中で、小学『語文』が一貫して推奨してきた、状況に応じて適切に行動する知恵、臨機応変な能力を発揮する人物として登場する。すなわち、李星華は父李大釗が裁きを受ける法廷に引き出され、裁判官が「これはお前の子供の中で一番年上か？」と問い質すと、彼女は父李大釗が答えるよりも先に「わたしが一番年上だ」と答えた。実は、李大釗一家には星華の上には兄が一人いたのだが、彼女は兄を事件に巻き込まないように咄嗟に機転を利かせて裁判官の問いに答えたのだった。李大釗も娘の意図を察し、「そうだ、この子が一番年上だ」と述べた[35]。裁判官を前にして李星華のとった行動は、窮地にさらされた場面で冷静に知恵と勇気を発揮する、人間の模範像を表している。

人民教育出版社刊『語文』六年下冊は「時代の特色と現代意識を前面に表すと同時に、児童に対して革命指導者と革命の伝統について教え、伝統的な教材に対して新しい意味を与えた」[36]と評価されるが、これはその一例であり、革命運動の先駆者を理解するための教材にも、時代を越えて現代

の小学生が共感できる普遍的な価値を求められていることを示す。

第三単元のもう一つの必須教材、第12課「为人民服务」（人民の為に奉仕する）[37]は、1944年9月5日、職務中に殉死した中国共産党員張思徳の追悼式で毛沢東が述べた追悼の辞を原文とする。

張思徳は1915年四川省の貧農の家庭に生まれ、1933年に中国工農紅革命軍に入隊、1934年から36年にかけて行われた長征に参加した後、1937年に中国共産党に入党した。党員となった張思徳は中央警備団警衛班長や毛沢東を警護する任に就いた後、1944年9月5日に陝北の根拠地、陝西省安塞県の山中で炭焼きの任務を遂行中に土砂の崩落事故に遭遇し29歳で死亡した。毛沢東は張思徳の死を悼み、同年9月8日、延安鳳凰山の麓の棗園で約千人の参加者を得て追悼式を開き、この追悼文を読み上げた。その後、この追悼文は抗日戦争を闘う兵士と共産党員の団結を促す象徴としてしばしば引用された。これと同時に「为人民服务」の題字は毛沢東によって揮毫され、中国共産党の奉仕精神を表す言葉として広く国民の中に広まった。

「为人民服务」の本文を見ると、全体は5つの段落から構成されるが、第1段落の冒頭には次のように記されている。

> 我々共産党と共産党が率いる八路軍、新四軍は革命の隊伍を組む。我々の隊伍は人民を解放する為にあり、徹底して人民の利益の為に働く。張思徳同志は我々のこの隊伍の中の同志である[38]。

この文章の冒頭には、共産党、八路軍、新四軍、革命という共産党を語る上で不可欠なキーワードが並ぶ。次いで、同文の主題となる「人民の利益の為に」のフレーズが登場し、張思徳は共産党員として人民の為に犠牲となったという説明が続く。第二段落においても、張思徳が人民の利益の為に死亡したことに敬意を表し、その死は泰山より重いと繰り返される。つづく第三段落では毛沢東の視点は一転し、追悼会に集まった党員と兵士に向けられる。同段落は「我々は人民の為に奉仕するものであり、よって

我々に欠点が有れば他者からの批判を受けることも怖れはしない」[39]という言葉で始まり、次いでこの文章の表題である「人民の為に奉仕する」というキーワードが登場した後に、人民の為に奉仕する以外に自分たちには道はないことを説く。

第四、第五段落でも、「人民の為に」は繰り返される。この演説がなされた当時、毛沢東は抗日戦争の最中にあって味方の犠牲を伴う戦闘を指揮する一方で、軍内に動揺を招くことは阻止しなければならないという立場にあった。その中で毛沢東はこの演説を通じて味方の結束を図り、その象徴として「人民の為に奉仕する」という言葉を掲げた。

全文約790字のこの演説の中で、「人民の為に」のフレーズは合計7度繰り返される。その中の1回はこの演説文の表題と同じ「人民の為に奉仕する」だが、「人民の利益の為に死ぬ」「人民の為に死ぬ」は合計3度唱えられている。尚且つ文中で毛沢東は「人民の利益の為の死」を「ところを得た死」と説き、人民の為に闘い戦死した同志には分け隔てなく敬意を表し追悼するとした。そして演説の最後は、「人民の為に犠牲となった同志は、それが炊事員であろうと戦士であろうと分け隔てなく追悼し、広汎な人民を含め団結を新たにする」[40]という言葉で締めくくられている。「人民の為に奉仕する」はこのように厳しい内容を説きながら、中国共産党の基本精神を表すものとして70年以上にわたり中国国民に示されてきた。

こうした背景を持つ「人民の為に奉仕する」は『語文』の教材となることで、改めて国民が革命の歴史を共有するためのキーワードと位置づけられている。これと同時に、「人民の為に奉仕する」の語からは、時代を越えて社会に通用する普遍的な価値を読み解くことが可能である。教師用指導書はこの点をとらえ、この教材の学習には中国革命の歴史を再確認するだけでなく、「児童が正しい革命的人生観を育む意義が有る」[41]と説いている。

〔第四単元　外国の名著〕

革命の為に捧げられた死は泰山より重く、人民を虐げた者の死は鴻毛に

も劣るとするならば、虐げられた者、社会的弱者として苛まれ、為す術の無い者の死には、如何なる意味が与えられるのか。第四単元は「外国文学の名著」を主題とし、必須教材には孤独と貧困の中で行き場を失う子供を描く作品が取り上げられている。

読解力を養い文学を鑑賞することは語文課程における最も重要な課題であり、『語文』では全冊を通じて国内外の文学作品が様々な形で取り上げられている。中国文学については、一年下冊から各冊で李白、杜甫、白居易などの名詩が暗誦教材となっている。現代文学に関しては、魯迅、老舎、巴金を筆頭に文学史上に名を残す作家や、現在も活動中の小説家の作品が配されている。中国の古典作品いついては、『語文』五年下冊第五単元「中国古典名著の旅」の中で第18課「将相和」と第19課「草船借箭」を必須教材に、第20課「景阳冈」（景陽岡）、第21課「猴王出世」（猴王出世）を略読教材に挙げている。「将相和」（将相、和す）は司馬遷作『史記』より「廉頗藺相如列伝」を原作とし、「草船借箭」は羅貫中作『三国志演義』の中のよく知られた一節であるが、『語文』ではこれらを平易な現代文に書き換えて教材としている。

これを受けて、『語文』六年下冊第四単元「外国の名著」は外国文学の作品を全文読了することを目的に短編作品が選ばれている。単元の中で必須教材の第14課「卖火柴的小女孩」（マッチ売りの少女）[42]はデンマークの作家アンデルセンの代表作であり、同じく第15課「凡卡」（ワーニカ）[43]はチェーホフの小説を原作とする。これに対して略読教材には第16課「鲁滨逊漂流记」（ロビンソン・クルーソー漂流記）[44]、第17課「汤姆·索亚历险记」（トム・ソーヤの冒険）[45]が配されている。

『語文』全冊には中国文学の作品と並んで外国文学の作品も様々な形で取り入れられている。アンデルセンの作品としては、既に二年下冊第28課「丑小鸭」（みにくいあひるの子）[46]を学習しており、アンデルセンは児童には馴染みのある作家である。この他にフランスのファーブル作『昆虫記』から三年上冊第14課「蜜蜂」（ミツバチ）[47]、四年上冊第7課「蟋蟀的住宅」

（コオロギの家）[48]が選ばれ、英国のワイルドの作品として四年上冊第9課「巨人的花园」（巨人の花園）[49]、ロシアの作家トルストイの作品として六年上冊第9課「穷人」（貧しい人）[50]などが採録されている。日本の作家からは新美南吉の作品として四年上冊第11課「去年的树」（去年の木）[51]、椋鳩十の作品から六年上冊第24課「金色的脚印」（金色の足跡）[52]が選ばれている。この中にあって、六年下冊第四単元は、外国人作家の短編作品を全文読み通し、作家の表現方法を理解するという目標を掲げる。教材の原作者であるアンデルセンとチェーホフはいずれも19世紀半ばに活躍し、その作品は世界中で翻訳されている。

前述のようにアンデルセンの作品は、既に二年下冊で「丑小鸭」を学習済みである。この作品は、生まれて間もない時は周りの仲間と異なる容姿のためにいじめられた雛が、成長すると皆が驚く美しい白鳥になるという筋書きで、児童に親しみ易い童話として選定されている。これに対して「卖火柴的小女孩」はアンデルセンが1848年に発表した作品で、日本では概ね小学校低学年以下を読者対象とする童話とみなされているが、中国の語文課程ではこの作品を『語文』六年下冊に組み入れている。この教材の学習目標について教師用指導書は「作品中の登場人物の運命に関心を持ち、作者の思想感情を読み取ること」[53]とし、この作品から作者アンデルセンの考えを読み取り、文学表現の特色を理解するよう促している。

作品の中で主人公の少女は、冷たく雪の降る大晦日の晩もマッチを売ろうと裸足で街を歩いていた。だがマッチは一つも売れず、このまま家に帰れば父親に叱られるだけだった。少女は為す術もなく、とある家の壁に体を寄せてうずくまり、凍える体を温めようとマッチを擦った。すると小さな炎の中に、温かい料理や美しいクリスマスツリーが浮かび上がった。幻に心を奪われた少女がさらに続けてマッチを擦ると、今は亡き祖母の慈愛に満ちた姿が現れた。少女は手にしたマッチをすべて燃やして祖母の姿をつなぎとめ辛い現実を訴えて、この苦しみから逃れるために「一緒に連れて行って」と乞うた。すると、少女は幻の中で祖母にいざなわれて天国に

迎えられ、静かにこの世を旅立った。翌朝マッチを手にしたまま亡くなった少女を見つけた人々は、「少女は自分の身体を暖めようとしたのだ」と口にしたが、最後は「少女がどんなにきれいなものを見たか、どんなに幸福を感じ、祖母と一緒に新年の幸福の中に旅立っていったか、誰にも分からなかった」という言葉で締めくくられている。つづいて本文のすぐ後には学習課題として「本文の最後の3段落を読んだ後、『寒さも飢えも、苦しみも無いところへ行った』というのはどんな意味か？」「『少女は本当に幸福で、祖母と一緒に新年の幸福の中に迎えられていった』とあるが、この文の中に書かれている二つの『幸福』をどのように理解するか？」という設問が付されている[54]。この設問に関連し、教師用指導書には「この作品では何故『幸福』という語を用いているのか？」という問いを児童が考察する指導例を紹介している[55]。この指導例は、教師が児童から「『寒さも飢え、苦しみも無いところ』というのは少女の夢の中の天国を指している。現実の生活の中で貧しい者には手に入れることが出来ず、天国へ行った時にだけ実現できるから」「この「幸福」は真の幸福ではない。彼女が『新年の幸福の中へ向かっていった』というのは、本当は少女が死んでしまったことを指している」という答えを導き出すことを想定して組み立てられている。

第15課「凡卡」も劣悪な環境で貧困と孤独に苛まれる子供を主人公とする。原作はロシアの作家チェーホフが1886年12月25日付で『ペテルブルグ新聞』に発表した短編小説である[56]。帝政時代のロシアで、9歳の少年ワーニカは両親と死別しモスクワの靴屋の徒弟に出された。奉公先の親方やその家族は些細なことでワーニカを殴り、食事も満足に与えなかった。奉公に来て三ヶ月経ち、クリスマスの前夜に親方一家が礼拝に出かけた後、一人店に残されたワーニカは、故郷の祖父に助けを求める手紙を書いた。その文面には、過酷な徒弟の暮らしと故郷への切々たる思いが綴られ、自分を故郷に連れて帰ってほしい、このままでは自分は死んでしまうと祖父に切願する言葉で埋められていた。ワーニカは手紙を郵便ポストに投函した

後、疲れ果てて眠りに落ちる。夢の中で、ワーニカは故郷の祖父が暖炉の前で自分が祖父に宛てた手紙を読む姿を目の当たりにするところで作品は終わる。

本文の後に付された設問には、少年ワーニカが祖父に出した手紙から帝政ロシア時代の徒弟の生活が如何に悲惨であったか考えること、「ワーニカ」を「マッチ売りの少女」と対比しながら読み、理解したことを発表することとされている[57]。また、この教材の教師用指導書には、「この教材はワーニカが祖父に宛てて書いた手紙の中に帝政ロシア時代の貧しい子供の悲惨な運命を反映し、当時の社会制度の腐敗と混乱を明らかにする」と述べるとともに、この教材の学習目的として、(1) 児童に外国文化を理解させ、登場人物の悲惨な運命に関心を抱かせる、(2) 作品に込められた思想感情を実感し作者の表現方法を学ぶ、(3) 外国の文学作品への関心を促す、とある[58]。

ここに選ばれた二つの作品は、いずれも貧困に苦しむ子供を主人公に据える。キリスト教社会ではクリスマスから新年にかけて、人々は一年で最も楽しく賑やかな季節を迎えるが、マッチ売りの少女は寒さと飢えのために生命を失い、ワーニカ少年は徒弟生活に苦しむ子供として描かれている。さらにこの二作はともに夢の中で唯一自分に愛情を注いでくれた祖父母に抱かれる、という形で締めくくられている。この二つの教材を通じ、何故このような悲劇が起こるのか、貧困がもたらす不幸から子供を守るには何が必要なのか、児童の眼を社会へと導くことが、この単元のもう一つの目標に据えられている。

〔第五単元　科学的精神〕

19世紀半ば以降、文学者としてアンデルセンとチェーホフが貧困にさらされる子供たちを描き、社会の矛盾を読者に意識させたのと同時期に、科学の世界でも後世に大きな影響を与える出来事が始まろうとしていた。すなわち1867年ポーランドの首都ワルシャワにマリア・サロメ・スクウォド

フスカ、後にキュリー夫人としてその名を知られる女児が誕生した。『語文』六年下冊第五単元は「科学的精神」主題とし、必須教材としてキュリー夫人を主人公とする第18課「跨越百年的美丽」（百年を越えて輝く美）[59]と第20課「真理诞生于一百个问号之后」（真理の誕生は百の疑問符の後に）[60]を採録する。略読教材には、第19課「千年梦圆在今朝」（千年の夢は今朝かなう）[61]と第21課「我最好的老师」（わたしの一番すばらしい先生）[62]が当てられる。

第18課「跨越百年的美丽」は中国の作家梁衡による同名の散文を原作とする。本文では、キュリー夫人が夫ピエールとともに放射能の研究に取り組み、女性として初めてノーベル賞を受賞した科学的業績とともに、私欲にとらわれず研究によって得た報酬を社会に還元した人格者として彼女の高潔な精神を強調する。

この教材では、「美」というキーワードが全体を貫く。児童は教材を読む中で何度も「美」という語に出会う。「美」は、まず初めにキュリー夫人の容貌の美しさを指す言葉として用いられる。次に教材の中ほどでは、まだ見ぬラジウムを取り出す実験を続ける中でキュリー夫人が夫ピエールに、未だ見ぬラジウムとはどんなものだろうかと尋ねると、ピエールは「ラジウムが美しい色であってほしいと願うだけだ」と答えた。そして3年9か月の苦闘の末に発見されたラジウムは夫婦の前に「美しく淡い青色」の光を放った。ところが、ラジウムが出す放射線はキュリー夫人の身体を傷つける存在でもあった。長年にわたる研究の中で彼女は放射線を受け続け、その美しく健康な姿を蝕んでいった。67歳でこの世を去ったキュリー夫人は、生涯に数多くの表彰を受け、その中には2回のノーベル賞受賞も含まれる。本文はキュリー夫人という美しい名前は、彼女が人生のすべてをかけて勝ち得たものであり、ラジウムの発見から百年の時を越え不朽の光を放ち続けていると説く。

科学者として成果を収めたキュリー夫人には、経済的利益を得る機会も与えられた。だが、彼女は私利私欲に惑わされることなく、科学の発展と

社会への貢献を目指す精神は揺らがなかった。彼女は研究の成功によって得た賞金を科学の発展と戦争の中で窮地にあったフランスを救う為に政府に寄付した。そのため、この教材は末尾にアインシュタインの言葉を引用し、「世界のあらゆる著名人の中で、ひとりマリー・キュリーだけが、名声におぼれなかった」[63]という言葉で結ばれている。科学者として卓越した業績を挙げながら、人生に対する真摯な姿勢を貫いたキュリー夫人は「時を越えた美」の象徴として讃えられる。同課本文の後ろには考察課題として「表題につけられた『美』とは、本文中のどこに表現されているのか？」[64]という設問が付されている。教師用指導書にも、この教材の学習目標は「科学研究に対するキュリー夫人の偉大な貢献と気高い精神を賛美し、『百年を越えて輝く美』の深い内容を理解する」[65]点にあると述べる。

「跨越百年的美丽」はキュリー夫人を評し、他の人間が見過ごしてしまうような小さなきっかけから発想を大きく展開したと述べるが、独りキュリー夫人だけではない。科学史上に画期的な発見はいずれも、不断の努力と注意深い観察、そして独創的な思考によって実現してきた。この単元の中に収められ、小学校『語文』全12冊の中でも最後の必須教材である第20課「真理诞生于一百个问号之后」は、生活の中の小さな疑問を見逃さず、その謎を探求し科学的成果を得た例を紹介する。本文に取り上げられるのは、バスタブの流水が作る渦巻と地球の自転、酸塩基指示薬の研究、睡眠中の脳と眼球の運動、という三つの例である。

まずバスタブ渦の研究[66]は、米国マサチューセッツ工科大のアーチャー・シャピロ教授が、バスタブの中の水を流すために栓を抜くと、水は渦を巻きながら排水溝から流れるのに気づいたことから始まった。シャピロ教授は、この現象が何故起きるのか研究を続け、1962年に論文を発表、排水溝にできる渦巻きには地球の自転が関係し、地球は西から東に旋回しているため、北半球では水は反時計回りの方向に渦を巻き、南半球では時計回りに、赤道上では渦は形成されないという見解を示した。論文発表後、シャピロ教授の研究は反響を呼び各国の研究者が各地で実験に取り組むことと

なった。

二つ目は、17世紀英国の科学者、ボイルの法則で知られる、ロバート・ボイル[67]を取り上げる。ある日彼は、研究室に向かう途中にたまたま咲いていた花を摘み取り、実験室のビーカーに挿しておいた。ところが彼の助手が不注意で花の上に塩酸を一滴こぼしたところ、その部分が赤く変色した。ボイルはこの現象を不思議に思い、様々な花を用いて実験を試みた。その結果、ボイルは植物の中には酸に触れると赤く、アルカリに触れると青く変色する性質をもつものが有ることを突き止めた。この研究は後にリトマス試験紙の開発につながった。

三つ目は睡眠中の脳の動きに関する研究が紹介される。あるオーストリア出身の医師[68]はある日偶然、子供が睡眠時に眼球が動いていることに気がついた。急いで子供を起こしてみると、子供はちょうど夢を見ている最中だった。彼はこれを不思議に思い実験を繰り返した結果、睡眠中の人の眼球が動いている場合、その人は夢を見ているという結果を得た。この実験をきっかけに、人が睡眠時に夢を見る現象を眼球の動きと関連付けて研究がおこなわれるようになった。『語文』六年下冊はこれら三つの例を、ありふれた現象の中から問題を見つけ出して探究した結果、科学的発見にたどり着いたという典型的事例と位置づけている。

『語文』各冊には科学読み物や科学に対する啓蒙的教材が必ず採録されている。それらの教材を通じて、児童は日常生活の中の科学的現象や著名な科学者の故事を学習しており、「真理诞生于一百个问号之后」はその総括としての意味を持つ。

〔第六単元　総合学習　忘れ難い小学生時代〕

第六単元には、小学校六年間にわたる語文課程を総括する総合学習の単元として、「忘れ難い小学生時代」と題し関連教材と学習目標が示されている。全体は「成長のしるし」「卒業の季節」と題する二つの部分に分かれる。前半は沙健孫[69]、劉紹棠[70]等の作家が自身の小学校時代を記した散文

を手本に、自分の小学時代を振り返って卒業記念文の作成やクラス会の開催を課題とする。後半は手本となる教材に倣って恩師への感謝状や卒業式の挨拶文の作成が課題として示される。

おわりに

学校教育のための教科書は、教育目標に沿って全体の枠組みが定められ教材が選ばれる。人民教育出版社『語文』六年下冊には4項目の学習目標が設定され、これに応じた教材が六つの単元の中に割り振られている。第1項の愛国主義、集団主義、社会主義的思想道徳と健全な審美観の育成に対しては第三単元「革命の先駆者」に最も強く反映されている。第2項の中国の文化・民俗の豊かさと多様性を知るには第二単元「中国の民俗」と第四単元「外国文学」が該当する。第3項の自国の言語文字と語文学習に対する関心の育成は第一単元「人生への思い」に委ねられ、第4項の思惟能力と科学的思考方法の育成は「科学的思考」を主題とする第五単元に設定されている。これらの目標に対する直接的な教材の配置に加え、『語文』六年下冊に載録された教材は互いに接点を持ち連携が保たれている。

まず、第一単元は中国文学の中から人生に向き合う姿勢を表す作品を教材に選んでいるが、中国の民俗文化を主題とする第二単元においても、中国現代を代表する作家老舎の「北京的春节」が必須教材となっている。つまり児童は第一単元と第二単元で『孟子』並びに『列子』の一節、朱自清作「匆匆」、老舎作「北京的春节」という中国文学史上に著名な作品を順次学んでいく。

つづく第三単元は「革命の先駆者」を主題とする。ここに載録されている「为人民服务」は毛沢東自筆の題字とあわせ、中国共産党の理念を表す象徴的存在であり、本文は中国革命のために犠牲は免れないという現実を正面から説く。同じ単元のもう一つの必須教材「十六年前的回忆」は李大釗一家が不当な裁判に直面する最中にも機転を利かせて家族を守ろうとした経緯を語る。つまり、この二つの教材も第一単元の場合と同じように、

一つの目標に専念し決死の努力を説く教材と、多様な視点から対象に接し独創性に満ちた成果を得る例という、二つの異なる教材から組み立てられている。

上記三つの単元が中国の作品から構成されるのに対して、第四単元は外国文学を主題とする。必須教材のアンデルセン作「卖火柴的小女孩」とチェーホフ作「凡卡」はともに19世紀後半のキリスト教社会を舞台に、孤独と貧困に苛まれる子供の運命を描く。この教材を通じて、児童には主人公たちの悲惨な境遇を理解することが求められる。

19世紀後半は人間の歴史に変革をもたらす、画期的な科学的発見が相次いだ時代でもあった。その結果、社会全体に従来の常識を覆す変化が生じ、「科学」を抜きにして人間の未来を語ることはできなくなった。「語文課程標準」は科学的思考の育成を目標の一つに掲げ、小学校『語文』全冊を通じて科学への関心を高めるための教材を取り上げている。六年下冊第五単元「科学的思考」はその集大成と位置づけられ、19世紀末から20世紀にかけて科学研究を通じて社会に貢献したキュリー夫人を教材に取り上げる。キュリー夫人は、まさにアンデルセン並びにチェーホフが社会の矛盾に目を向けて作品を世に問うた時代に生まれた人物であり、この教材の中では科学研究の業績のみならず自分が手にした報酬を社会に献じた精神を讃えられている。

「跨越百年的美丽」はキュリー夫人が科学研究に専念する姿を正面から描く点で第1課の「学奕」と価値観を共有する教材である。これに対して、「真理诞生于一百个问号之后」は日常の現象を独創的な発想で捉えた点で、第1課の「两小儿辩日」と同質性を示す。つまり第五単元もまた、第一単元と同じ教材構成で編集されていることが分かる。

本冊最後の必須教材として「真理诞生于一百个问号之后」の文末は、「偶然の機会は、座して得られることなど無く不屈の精神で努力を重ねた者にのみ訪れる」という言葉で締めくくられている。これは、第1課で『孟子』並びに『列子』から抄出された一節と通底し、「新しい科学の発見は、不断

の努力を惜しまない姿勢と常識に囚われずに本質を直視して孔子に迫った童子の思考方法を併せ持つ者にのみ、もたらされる」と言う主張を、再度読み手にうったえるものである。

庶民にとっての春節とクリスマス、これを見つめる文学者と革命の先駆者、努力と独創性、自国の文化に対する自信と外国文化に対する知識、文学と科学等、『語文』六年下冊に収められた教材は多様な要素を複層的に積み上げ幾重にも関連させて編集されている。これは、ここに掲げられた目標が相互に関連し、そのいずれもが単純な方法では達成できないことを表すものでもある。

---

1 1950年8月「小学語文課程暫行標準」（草案）第一章「目標」。

2 文部科学省『諸外国の教育動向　2007年度版』「Ⅱ. 教科書制度と教育事情 10. 中国」（明石書店2008年8月）p59。

3 現代中国の語文課程教科書と教育制度については、前掲文部科学省『諸外国の教育動向　2007年度版』「Ⅱ. 教科書制度と教育事情　10. 中国」（明石書店2008年8月）、三野園子「中国の語文教育―語文課程標準を基礎資料として」『アジア社会文化研究』第9号2008年、王智新『現代中国の教育』（現代中国叢書1　明石書店2004年）、武小燕『改革開放後中国の愛国主義教育―社会の近代化と徳育の機能をめぐって』（大学教育出版2013年）を参照。

4 中華人民共和国教育部「義務教育語文課程標準（2011年版）」第一部分「前言」第2段。

5 中華人民共和国教育部「義務教育語文課程標準（2011年版）」第二部分「課程目標与内容」一「総体目標与内容」。

6 同上「義務教育語文課程標準（2011年版）」第二部分二「学段目標与内容」。

7 課程教育研究所・小学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書　語文』一年級から六年級まで、各学年上下冊で全12冊（人民教育出版社発行　2001年に1年級第1版発行、以下年次ごとに順次発行）。

8 課程教育研究所・小学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書　語文』六年級下冊（人民教育出版社発行　2006年第1版）。

9 「《義務教育課程標準実験教科書語文六年級下冊》簡介」（2007年1月25日）人教

網。http://www.pep.com.cn/xiaoyu/jiaoshi/tbjx/mulu/jianjie/201008/t20100818_663236.htm（2014年9月22日現在）

[10] 課程教材研究所小学語文課程研究開発中心「人民教育出版社義務教育課程標準小学語文実験教科書介紹」（2007年5月25日）。

[11] 前掲「《義務教育課程標準実験教科書語文六年級下冊》簡介」。

[12]「学弈」は『孟子』（告子章句 上 九）より抄録。

[13]「两小儿辩日」は『列子』（湯問第五 七）より抄録。

[14] 朱自清作「匆匆」1922年発表。

[15] 林清玄作「桃花心木」。原作者林清玄は1953年生まれ、台湾高雄出身の作家。新聞記者を経て1973年から小説、散文等文学作品を発表。

[16]「顶碗少年」の原作者趙麗宏は1951年上海出身。散文、ルポルタージュ等を多数発表、2000年に第1回「冰心散文賞」受賞。

[17]「手指」、原作者は豊子愷（1898～1975）は浙江省出身の画家、文章家、教育者。日常生活の中の一コマを切り取って主題とする散文は情感に溢れ、多くの愛読者をもつ。

[18] 老舎作「北京的春节」は1951年1月雑誌『新観察』に発表。

[19] 馬晨明作「藏戏」、作者馬晨明は1977年生れ、山東省出身。新聞記者としてチベットを取材し作品を発表。

[20]『語文』六年下冊第8課「各具特色的民居」。

[21]「和田的维吾尔」の原作者権鵬飛は1963年陝西省出身、『新疆日報』通信員を経て作家活動を開始した。「和田的维吾尔」は上記通信員時代の取材に基づいて書かれている。

[22]『語文』五年上冊第26課「开国大典」。

[23]『語文』六年下冊第6課「北京的春天」p27。

[24]『語文』一年下冊第22課「吃水不忘挖井人」。

[25] 人民教育出版社刊『義務教育課程標準実験教科書　語文』五年上冊第八単元は、毛沢東を主題とし、第25課「七律・长征」、第26課「开国大典」、第27課「青山处处埋忠骨」、第28課「毛主席在花山」が採録されている。この他に、『語文』一年級下冊第22課『吃水不忘挖井人』も毛沢東の逸話を主題とする教材である。

[26]『語文』全冊の中で鄧小平を主題とする教材は、一年級下冊第3課『邓小平爷爷植树』、二年上冊第8課『难忘的一天』がある。

[27]『語文』全冊の中で周恩来を主題とする教材は、二年下冊第11課『难忘的泼水

节』、四年級上冊第25課『为中华之崛起而读书』、六年下冊第13課『一夜的工作』（何其芳 作）の三つがある。

[28] 二年下冊第6課『雷锋叔叔，你在哪里』。

[29]『語文』三年上冊『我不能失信』は宋慶齢を主題とする教材。

[30]『語文』六年下冊第10課「十六年前的回忆」（李星華 原作）。

[31]『語文』六年下冊第12課「为人民服务」。

[32]『語文』六年下冊第11課「灯光」（王愿堅 原作）。

[33]『語文』六年下冊第13課『一夜的工作』（何其芳 原作）。

[34] 李大釗とその家族については、以下の資料を参照。宋霖『李大釗家族史研究』安徽人民出版社2005年、北京李大釗故居管理処編著、北京李大釗故居研究室編『李大釗研究索引　1927－2008』文物出版社2009年、王潔主編『北京李大釗故居』文物出版社2009年。

[35]『語文』六年下冊第10課「十六年前的回忆」p49。

[36] 前掲「《义务教育课程标准教科书语文六年级下册》简介」。

[37]『語文』六年下冊第12課「为人民服务」。

[38] 同上p55。

[39] 同上p55。

[40] 同上p56。

[41] 人民教育出版社刊　課程教材研究所・小学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書　語文』六年下冊『教師教学用書』第12課「为人民服务」p118。

[42]『語文』六年下冊第14課「卖火柴的小女孩」。

[43]『語文』六年下冊第15課「凡卡」。

[44]『語文』六年下冊第16課「鲁滨逊漂流记」。

[45]『語文』六年下冊第17課「汤姆·索亚历险记」。

[46]『語文』二年下冊第28課「丑小鸭」。

[47]『語文』三年上冊第14課「蜜蜂」。内容から判断し、『ファーブル昆虫記』の中でこの教材に該当するのは日本語版では山田吉彦・林達夫訳『ファーブル昆虫記（二）』（岩波文庫　1993年）七「ぬりはなばちの新しい研究」に相当する。

[48]『語文』四年上冊第7課「蟋蟀的住宅」。日本語訳は山田吉彦・林達夫訳『ファーブル昆虫記（六）』（岩波文庫　1993年）十三「住居と卵」参照。

[49]『語文』四年上冊第9課「巨人的花园」。原作はOSCAR WILDE “THE SELFISH GIANT”、本稿ではTHE WRITINGS OF OSCAR WILDE “A house of Pomegran-

nantes The Happy Prince and other Tales” — A.R. KELLER & CO. Inc所収を参照。

[50]『語文』六年上冊第9課「穷人」。

[51]『語文』四年上冊第11課「去年的树」、原作は新美南吉「去年の木」。『ごんぎつね　新美南吉童話作品集1』大日本図書等1988年等所収。

[52]『語文』六年上冊第24課「金色的脚印」、原作は椋鳩十「金色のあしあと」。『椋鳩十動物童話集　第8巻』（小峰書店　1990年）等所収。

[53] 前掲『教師教学用書』第14課「卖火柴的小女孩」二「教学目標」p144。

[54]『語文』六年下冊第14課「卖火柴的小女孩」p71。

[55] 前掲『教師教学用書』p146～148。

[56] この作品の日本語版は、本稿では松下裕訳『子どもたち・曠野　他十篇』（岩波文庫　赤623－6　2009年）所収「ワーニカ」を参照。

[57]『語文』六年下冊第15課「凡卡」p78。

[58] 前掲『教師教学用書』第15課「凡卡」一「教材解読」p152。

[59]『語文』六年下冊第18課「跨越百年的美丽」（梁衡 原作）。

[60]『語文』六年下冊第20課「真理诞生于一百个问号之后」（葉永烈 原作）。

[61]『語文』六年下冊第19課「千年梦圆在今朝」。

[62]『語文』六年下冊第21課「我最好的老师」。

[63]『語文』六年下冊第18課「跨越百年的美丽」p103。

[64]『語文』六年下冊第18課「跨越百年的美丽」p103。

[65] 前掲『教師教学用書』第18課「跨越百年的美丽」二「教学目標」p193。

[66] バスタブ渦に関する説明は、横山直人（京都大学大学院工学研究科）、水島二郎（同志社大学理工学部）「バスタブ渦の起源」（Jounal of Physical Society of Japan 81 (2012) No.7, p.077401）参照。バスタブ渦の実験を成功させるには、緻密で大型の装置を必要とするため、家庭用のバスタブでは正確な結果が得られないとされるが、本稿では『語文』6年下冊にどのような教材が掲載されているのかを確認することを研究目標としており、「真理诞生于一百个问号之后」の本文に従って論考を進める。

[67] 英国の化学者ロバート・ボイル（1627～1691）の略歴と彼のおこなった指示薬の研究については、島尾永康「ロバート・ボイル」『和光純薬時報』Vol.72 No.2　2004年4月を参照。

[68] 前掲「真理诞生于一百个问号之后」p111には、「オーストリアの医師が睡眠中の子供の眼球が動く現象に気が付いた」と書かれているが、医師の氏名については表記がない。睡眠中に眼球が動く現象はレム睡眠と称されるが、レム睡眠

の研究は1953年シカゴ大学のユージン・アセリンスキーとナサニエル・クレイトマンによって始められた。教材の記述から、この教材に登場する医師はユージン・アセリンスキーと考えられる。

[69]『語文』六年下冊第六単元　閲読材料1沙健孫「难忘的启蒙」。

[70]『語文』六年下冊第六単元　閲読材料2劉紹棠「老师领进门」。